

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十二主日(8/8)礼拝

「釘付けられた神」

ルカ福音書第23章32節から第23章34節

### 【聖書】

ルカによる福音書23:32ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。33「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。34〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。

## 1 罪を知る季節

日本の8月は、太平洋戦争という人間の罪が引き起こした惨禍を思い起し、平和を祈る季節。しかし、今年は少し様子が違います。新型コロナパンデミックによって医療崩壊した世界と、オリンピックが開催されて競技に熱狂する世界が同時に進行しています、かたや感染しても放置され自室で苦しめぬく人々がいる一方で、テレビをつければ連日の熱戦とメダル獲得に湧く人々。とても同じ世界とは思えない、全く異なる世界が同時進行で進むパラレルワールドのドラマを見ているようです。オリンピックに関しては色んな意見があるかと思いますが、このような医療崩壊をもたらしたのは私たち人間の罪である事は確かでしょう。今年は、殊更、人の罪深さを経験する夏となりました。

そんな中で迎えた今朝の礼拝、私たちの前に「そこで人々はイエスを十字架につけた。」というみ言葉が与えられています。今日は、ルカが簡潔に語るイエス・キリストが十字架にかかる場面を共に見ていきたいと思えます。

## 2 神を釘づける

「そこで人々はイエスを十字架につけた。」イエスという神と等しい方、神の独り子を十字架に釘づける、人が神を釘付けて殺す。恐ろしいことです。全能の神のみ体が十字架に架けられている、ここで釘に貫かれているのは、全能の神の御手、宇宙を、私たち人間を造られた手。彼らは全知全能の神の御足にも打ち込みます。私たち人間に平和を宣べ伝える為に来られた美しい使者の足。天地を飲み込むような大きな出来事が、静かに進んでいます。

そして、ここに描かれているのは、人間の真実の姿です。つまり、人は、神を釘づけて殺すほどに神と敵対している存在であることを示しているのです。ある説教者は、「神と人は不倶戴天の仇であった」と語るほどです。不倶戴天、共に天を頂くことができない、共に生きる事はできない敵同士、二人が会えばどちらかが死ぬしかない関係であると言います。人間とは神なしで生きることができない、にも拘らず、神を殺そうとする、矛盾に満ちた存在です。だから、カールバルトは、このテキストの説教で次のように言いました。「イエス・キリストの苦難と死の物語の中に、全世界の歴史が含まれている」繰り返される戦争の歴史、自らの利益のためなら、他者の命を圧殺する事をよしとする人間の歴史を見れば、バルトのこの見解は正しいと思います。

そして、以前、皆さんにも紹介したことがあるゴルヴィツァー牧師は、同じことを別の言葉でこう語ります。「イエスが十字架に釘づけられた時以来ずっと、無数の人々が、ここで働いていた兵士たちの仲間になりたいと考え、ここで彼らがしているのと同じように、神を釘付けにしてきた」と。

では、イエスを十字架に釘で打ち付けようとする時、人々は実際には何をしようとしたのでしょうか？彼らは、神ご自身を自分のものにしようとしたのです。神を釘付けにして、自分たちの力の中に閉じ込めようとする、人は、イエスがもう自分たちに何もできないように、と彼を釘付けにするのです。

2000年前の「されこうべ」と呼ばれる丘で、神を釘づけにして以降、無数の人々、つまり、君主や法王、牧師や国家の要人、教授や政治家、皇帝や官僚、金持ち達は、キリストを釘づけにした兵士たちの仲間となってきました。人々は、自分たちの世界の中からキリストを取り除こうとし、イエスの体に釘を一本一本打ちこんで来ました。

こう言いますと、当然、次のような問いが出されるでしょう。「いったい、彼らはどこでどう、キリストを取り除こうとしているのですか？」私たちは、この問いにどう答えればよいのでしょうか。

人間の生活には、目には見えませんが、神がすぐ「そこに」おられる生活です。神は人々に許可もえようとせず、尋ねようともなさないまま、人々の生活の中に入り込み、彼らの主人であろうとされるからです。しかし、人々は、それが嫌なのです。自分の主人は自分でいたい。だから、神の自分に対する主権を覆し、自分の手に取り戻そうします。それが、神を十字架に釘付けることではないかと思えます。人々は、ありとあらゆる欺瞞の業を用い、自分たちの生活の中で共にいてくださるイエスを十字架に磔け、二度と自分の生活に入って来て主人になることがないようにと、釘を打ちこむのです。

人類は、偉大な思想や偉大な芸術、科学技術を生み出してきました。崇高

な理想も追求してきました。そして人々は、自分達人類こそ、この世界の支配者にふさわしい、と胸をはりたいのです。その影で、邪魔なイエスを釘付けにしてきました。自分たちこそ、この世界の支配者だと主張し続けるために。そうして、今、環境は破壊され、未知の新型ウィルスが、人類に襲いかかっています。救い主を釘づけた、全能の神を釘づけた人類に、果たしてどのような希望があるのでしょうか。

### 3 赦し

驚くべきことではありますが、人類の希望は、その釘づけされている神からもたらされます。イエスは、ご自身の手足に釘を打ち込まれつつ、全く新しいものを人類の歴史にもたらしました。それは、一つの奇跡と言ってもよいと思います。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」と祈りつつ。イエスは、自分を殺し神に反逆する者を救おうとされています。そうすることで、「この釘付けられている者こそ、全能の神である」ということを示されたのです。何故なら、この祈りによって、全く新しい「赦し」がこの世界にもたらされたからです。神に対する人の反逆と、人に対する神の裁き、両者がぶつかったところに立てられたキリストの十字架は、真の王の玉座でありました。そこで、真の王である主イエスは、また、釘付けられた子なる神として、人々に罪の赦しをもたらず執り成しの祈りを父なる神に捧げたのです。子なる神として、大地とそこにあるもの全ての所有者である筈のイエス・キリストが、ほんの僅かな十字架の横木に釘づけられつつ、人々を赦しました。それが、人類の罪の歴史に決定的な変化をもたらしたのです。

何故なら、「全能の神が赦す」というのは、罪を取り去るという事だからです。ですから、主イエスの祈りは次のように言い換えることができる、ゴルヴィツァー牧師は言います。「父よ、彼らの罪をそのまま彼らに残しておかないでください。取り去ってください。人間が、自分たちの生命の造り主に逆らってなしたこの決断を、彼らの最後の決断としないでください。どうか彼らの罪を赦し、あなに立ち帰り悔い改め、方向転換しやり直す事ができる者につくりかえてください。」と主イエスは父なる御神に祈ってくださいます。

自分の犯した罪の行いについて厳しく後悔する、という経験のある人は、分かると思います。その行いが赦されない限り、自分がしでかした罪から決して抜け出すことができない、という事を。ですから、罪は人にとって牢獄のようなものであり、罪の赦しは、その牢獄からの解放です。しかし、神を

釘づけにするような罪を赦すことができるのは、まことの神のみ。だから、主イエスは、次のように祈ったともいえます。「父よ、どうか彼らを、彼らが犯した罪から、私を釘づけにして殺すという罪から解き放ってください。父よ、人をその罪の行いのうちに縛り捕えておこうとしないでください。」自らを差し出しつつ祈る主イエスのこの祈りに打ち抜かれた人々は多くいます。皆さんもそうではないでしょうか。

#### 4 何をしているのか分からない。

そう、人類史上に名を残す事もない私たちも、また、主に祈られる「何をしているか知らない者」なのです。主イエスを釘で十字架に打ち付ける者です。この「何をしているか知らない」という言葉をよく見ていけばそれが分かるのです。この祈りの言葉が、私たちが犯す罪が具体的にはどのようなものを語るからです。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」という祈りを丁寧に見ていきたいと思えます。

この祈りは、あまりに有名な祈りで、その内容に圧倒されて気づきにくいのですが、いくつかの謎があります。第一に、主はこの時、誰のために祈ったのでしょうか。「彼ら」というのは誰でしょうか。更にここでは「何をしているか知らない」から「ゆるしてください」とあります。「何をしているか知らない」という事は「赦し」の条件になるのでしょうか。イエスは、はっきりと意識して罪を犯した者と、知らずに罪を犯した者との間を区別しておられるのでしょうか。意識的に罪を犯した者を赦しから排除し、知らずに犯した者だけを赦しに含めておられるのでしょうか。「知らずにやった罪は軽いので、赦してやってください」というのでしょうか。

まず、主がここで祈る「彼ら」とは、普通に考えれば、ご自身を十字架に釘づけた兵士達でしょう。では、何故、彼らはイエスを釘づけたのかと言えば、上官の命令であり、上官の命令に従うことは軍記です、つまり、彼らがここでやったことは、彼らの職務であり、彼らはそれに忠実であったに過ぎないと言えます。だから、兵士達は罪を免れているのではないのでしょうか。

いえ、そうではない、と聖書は語ります。寧ろ、「義務だから」と忠実に果たすことこそ、罪である、とイエスは言われます。この世には、神を釘づけるような義務、不正な義務があります。その可能性を知ろうとも、考えようともせずに「義務だから」と受け入れて実行する、この態度こそ、私達の罪でありましょう。

更に、私たちは、前の章でローマ総督ピラトを見てきました。彼は、何とかユダヤ人指導者達がイエスを死刑にしてくれ、という要求を突っぱねよう

としました。かれらの要求が不正なものだと知っていたからです。しかし、彼はその確信に徹しきる勇気を持たず、遂に大勢に押し切られました。ピラトに見られるのは、優柔不断、そして騒動を起こされたくないという自己保身です。ピラトと同じように、これらの事に心を奪われ、どれだけ多くの人が神を打ち殺し、たえず、キリストを十字架につけて来たことでしょうか。私たちにも、同じような罪が見いだせるのではないのでしょうか。

兵士達やピラトを見てきて思うのですが、私たち犯す罪の多くには、曖昧さがつきまといます。「どこからどう見てもはっきりと罪だ!」と言えるものは案外、少ない。大概のものが、罪かどうかははっきりとしないままです。だから私達は、考えます。「何しろ、自分が何をしているのか分からなかったのだから。分かっていたら犯さないだろう。私たちがしたことは、弁明できるものだし、十分情状酌量の余地があるのではないだろうか?」と。

そうです、みな、「自分が何をしているか分からない」のです。しかし、この無知こそが、神を釘付けにしました。彼らは、イエスを神だと知らないのです。ですが、本当は知ることができたのです。彼らは、ただ知ろうしなかったのです。何故なら、イエスを神だと考えたくなかったから。もし、イエスが神だと知ったら、どんなことになるでしょうか、自分の主人は自分でいられなくなる、もっと面倒な事が生活の中に起こるだろう、と考えたのです。だから、どんな人も言い逃れなんてできないし、情状酌量もできません。知ろうとしなかったこと、それが罪だからです。

私はこのことを「サイレント・フクシマ」と言うドキュメンタリーから痛感しました。スイス育ちの日本人監督が、福島第一原発事故のその後をずっと追いつける人々を通して原発事故の現状を描いた番組で、オリンピックの開会式が行われた7/23にスイス国営放送で放映されたそうです。衝撃を受けました。福島は今も原発事故の非常事態宣言が続いている、しかし、原発ビジネスを推進しオリンピックを誘致したい政府は、危険な状態を隠し、事故はもう大丈夫だ、と復興をアピールしている。例えば、帰宅困難地域を狭めるために、年間の被曝量の上限を20倍に引き上げて、事故直後に危険地域と指定された所に人々を帰還させようとしている、汚染土の除染は、全体の20%しか終わっておらず、高い線量を示す山や林が広がっている。そんな中、安全・安心と復興を内外に誇示するため、オリンピックで人々の目に触れる所だけは、広い道路を造り、真新しい住宅や近代的なスタジアムや公園をつくる、常磐線を無理やり開通させ近代的な駅舎を建てる。そして、まるで、映画か何かの撮影のように、きれいに復興した町の中を聖火ランナーが走る。だが、カメラをずっと引いて俯瞰してみると、そのまわりには、時に取り残されたように荒廃した町が広がる。東日本震災の被害が年々風化

する中で、福島第一原発事故の現状を何とか人々に伝えようとしている懸命に活動するコメディアンかつフリージャーナリストの方の言葉が印象的でした。その方は、放射能を恐れ自主的に避難している人々を支援しているのですが、政府がこれらの人々への支援金を打ち切ったことで、日本全国で裁判が起こされています。その裁判を傍聴した後、彼女は語りました。「私はいつもいなのですが、裁判官の人達は、どうか、現地に言って実情を見てから判決を書いて欲しい。決して現状を見ずに判決を出さないで欲しい。」また、別の人は言いました。「政府も経済界も隠したいんですよ、この現状を」また福島第一原発近辺の土地出身の写真家は言います。「人は忘れやすい。だから、忘れないように、ずっと写真を撮り続けるんだ。」これらの言葉に私自身は、自分の深い罪を示された思いがしました。私も、政府が色々と不都合なことを隠して、オリンピックを誘致してきたということを、臆げながらに知っていました。しかし、福島第一原発にこだわり続ける事はしなかった、知ろうとしなかった。知ってしまえば、なんだか面倒くさいことになるような気がしたから。「原発には反対」といいつつも、家や仕事や家族を失い、故郷を離れて人間関係を失い、援助金もたたれ困窮している避難民の声を聞くよりも、自分のまわりが波風立たないことを求めています。そうすることで無意識のうちに、小さく弱く貧しくされた人々を踏みつけにしている人々に加わっていた、それは、彼ら小さくされた人々の中におられるイエス・キリストを無視し、釘付けにする事でした。

「知らずに犯す罪」の深さを思います。イエス・キリストを釘づけにしていたのは、歴史上の人々ではない、この私でありました。カール・バルトは、先ほど申し上げた「イエス・キリストの苦難と死の物語の中に、全世界の歴史が含まれている」と言う言葉の後に次のように付け加えています。「いや、それだけではない、私たちのめいめい個々人の歴史が含まれている。」私もそうだと思います。

## 5 釘付けにされた神

そして、まことに不思議な事ですが、そのように神を釘付けにする者であるからこそ、イエスの次の祈りを聞くことができます。この赦しを聞くことができるのは、「されこうべ」と呼ばれる丘に2000年前に立てられた十字架のもとだけです。そこで、「他の誰でもない、この私が神を釘づけたのだ」と、誤魔化しようがないほど示された者だけが、このキリストの祈りを聞くことができます。

み子は十字架に釘付けられつつ、父に次のように語ります。『主よ、どう

か、彼らのあの罪の行いを罪とは御覧にならないでください。彼らは混乱し、道に迷っているのだとお考えください。あなたに逆らう、隠れた、低い決断をご覧になりませんように。何が彼らをそういう決断を軽率にさせたかを全て御覧ください。知ろうとしないことを、彼らの病としてお考えください。』イエスは、このように人間には考えられない愛で祈ることにより、私たちを、深く根を張っている罪の土壌からまるごと掘り起こし、神に差し出されるのです。イエスは、自身を釘付けにする私達を、まるごと神の者としてくださる。すなわち、私たちの罪の深い淵の底にまで降りてきて釘づけになってくださり、そこで赦しを求めて祈る事により、救いの道を開いてくださったのです。何とも不思議な事です。

イエス・キリストの苦難と死の物語は、自身を釘づけにする者達の救い主になってくださる神の物語でした。そして私たちも又、その物語の中に登場します。私たちは、この祈りを聞くために、イエスの十字架のもとに集い、この方を自分自身の神として礼拝している、そうしてイエス・キリストの苦難と死の物語を生きているのです。

皆さんも、聖書のこの祈りの前後が [ ] で囲まれているのに気づいているでしょう。それは、ルカ福音書の二、三の有力な写本に、イエスのこの祈りが無い、という事を示しています。だから、多くの神学者は、「もともとのルカ福音書には、この節、34節の前半の祈りの部分は全くなかったものであり、後になって付け加えられたものだ」と考えています。しかし、私たちは、そうだとは考えません。実際は、おそらく逆だったのです。何人かの写筆者は、イエスを見捨てた者や、イエスを迫害したユダヤ人、彼を裁いたローマ人、イエスを釘付けにした残忍な兵士たちに、イエスの愛と赦しをあてはめることに我慢がならなかったのです。

ですが、何人かの人を書き写さなかった祈りこそ福音。教会は、この祈りを、神を釘付けにするこの世へと宣べ伝えてきました。イエスは、自らを釘づける人々、神に逆らい神を釘づけて殺そうとするこの世全体を、その赦しの眼差しで包んでおられる、そうして、この世をその罪から救い出し、この世を憐み、病める、弱き世として父なる神に差し出しておられるのです。

人々が、私たちが、イエスからその着物を奪った時、また自分たちの上で燃えるような太陽による激しい渇きに耐えている方に対し何の同情も持たず、さいころ遊びをして主の着物を分け合っている時、その彼らのために、私たちのために、イエスご自身は貧しく、弱く、瀕死の様子になりました。そのことによって、私たちすべては、生きています。神を釘付けにした者達が、釘づけにされたイエスの苦しみと死を通して、神に赦され神の者として生きるようになるのです。不思議なこと、ありえないこと。イエス・キリス

トによって神の者とされた私たちすべては、この救いの出来事に対し、日ごとに感謝をささげます。